

SKYMENU 活用授業 実践レポート

お名前	門田 倫瑠	学校名	安城市立安城南部小学校
実施学年	小学校6年生	教科	道徳科
単元名	理解し合うために【B相互理解、寛容】 みんな、おかしいよ! (出典:「きみがいちばんひかるとき6」光村図書)		

《学びを深めたいポイント》

本実践では、相手と理解し合うために必要な心について考える。理解し合うにはどうすればよかったのかについて、役割演技やインタビューを通して考えさせる。思い込みで一方向的に話すのではなく、対話することの大切さや、自分を思って間違いを正してくれる友達の考えを受け入れることの大切さに気付かせたい。

相手の間違いを指摘することや、間違いを指摘する相手を受け入れて素直に認めることは、簡単なことではない。そこで、「自分ならできるか」と適宜揺さぶりをかけ、和花の姿に自分を重ねたり、自分の経験をもとに話したりすることで、その難しさについても考えさせたい。

相手と理解するために必要な心や難しさについて話し合うことを通して、互いに理解し合うことや相手の考えを受け入れるよさに気付いてほしいと考えた。自分自身の成長とともに、よりよい人間関係を築こうとする実践意欲と態度を養っていくことを期待するした。

《SKYMENU 活用のポイント》

本時では、三つの活用のポイントがある。

一つ目は発表ノートである。あらすじの確認を発表ノートにまとめ、児童に提示することで、板書の手間をなくし、話し合いの時間を十分に確保できるようにする。また、黒板には書かずに、必要なときのみ TV に映すことができるので、板書には話し合いの深まりのみすっきりとまとめることができる。

二つ目は、発表ノートの画面一覧の活用である。高学年になると、「だれが良いと思うか」「自分だったらどうするか」という問いかけに対し、多数派の意見に流されやすくなってしまう。挙手ではなく、画面の中で自分と向き合って選択し、画面一覧で確認することによって、児童の素直な意見を大切にできる。

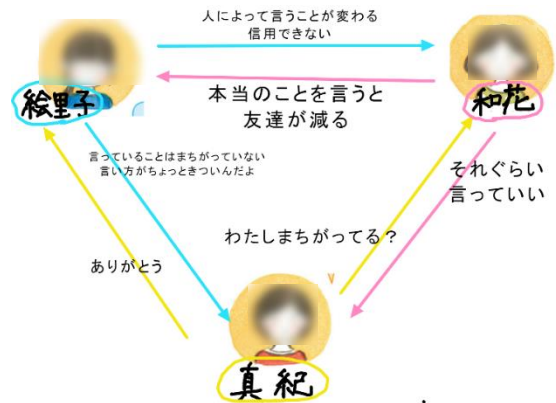
三つめは、気づきメモである。以前は、教材を読んで感じたことをノートに書かせていたため、机間指導をしながら横目に見る程度で、把握しきことは難しかった。また、「書く」という動作には時間がかかっていた。そのため、書くことに時間を確保すべきか、話し合いに十分な時間を確保すべきかを天秤にかけ、仕方なく書かせることを諦めていたときもあった。気づきメモを活用すれば、「児童の考えを把握しきれないこと」「書くことに時間がかかってしまうこと」の2点が解消される。教材を読み、児童に思ったことを自由に入力させる。回収する手間もなく、入力が終わったものから教師用のタブレットに表示される。誰がどんな考えを持っているのか瞬時に把握できる。それだけでなく、全員の考えに目を通せるため、その後の授業展開の手立てとしても効果的である。

《実践内容》

	学習活動	SKYMENU 活用場面	活用のポイント
導 入	1 友達が間違っていたときの自分の行動を振り返り、本時の学習課題を確認する		
	相手と理解し合うには、どんな心が大切？		
展 開	2 あらすじを確認し、3人の関わり方について考える。 (1)3人のうち一番すてきだと思う人物と理由を発表する。 (2)真紀はどうしてありがとうと言えたのか考える。 (3)和花と絵里子の関わりについて、双方に足りなかったことを考える。	【*1】 ・発表ノートであらすじを確認。 【*2】 ・発表ノートで、選んだ人のページを選ぶように指示し、画面一覧で児童の選択を把握。 【*3】 ・気づきメモの感想から、意図的に指名し、役割演技を行う。	・板書にかかってしまう時間を省略でき、話し合いの時間を確保できる。 ・板書すると黒板のスペースを大きくとってしまうが、TV に映すことで、話し合ったことを書くスペースを十分に確保でき、すっきりとした板書になる。 ・挙手による意思表示では、多数派への同調が起こってしまう可能性がある。自分の気持ちと向き合い、画面上で選択させることで、児童の素直な考えを表出できる。 ・画面一覧で確認すれば、誰がどんな意見を持っているのかを把握することができる。また、それをTVに移すことで自分の考えと異なる人がいることが一目瞭然になる。 ・気づきメモで教材を読んだ感想を書くようにすれば、誰がどんな考えを持っているのか、確実に把握できるため、意図的指名に役立つ。
ま と め	3 振り返りをする。		

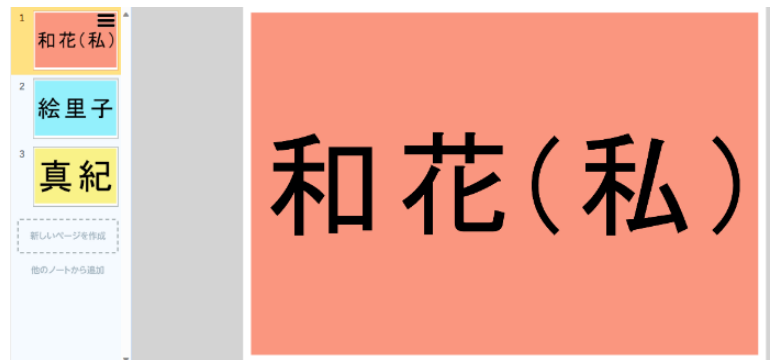
【*1】

導入では、教材のあらすじをまとめた[発表ノート]を提示した。[発表ノート]は核心に迫るために必要な部分のみを抜粋して作成。それにより導入がスムーズになった。画用紙やマグネットで教材を作成したり、定規などを使って黒板で情報を整理したりしていた頃はあらすじの確認や準備にかなり時間がかかっていたが、授業の展開が早くなったことで、児童が考えたり、議論したりする時間をより多く取れるようになった。



【*2】

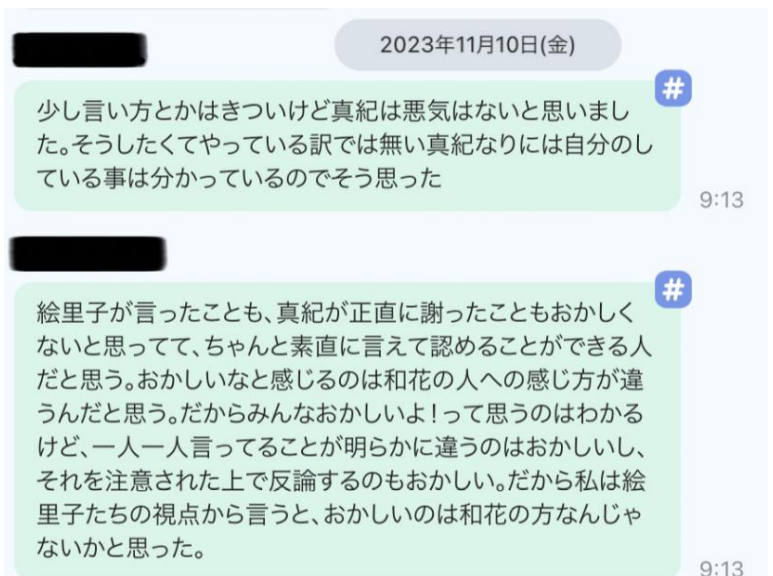
あらすじを確認した後、児童に「誰が一番素敵だと思うか」と問いかけた。回答の際は、あらかじめ児童に配付しておいた[発表ノート]を使った。[発表ノート]には、1枚のスライドに一人の登場人物の名前を書いておき、それぞれ異なる背景色を設定した。そして一番素敵だと思う登場人物の名前が書いてあるスライドを表示したままにしておくように指示した。その後、教員機の[画面一覧]で状況を確認し、テレビに投影しました。絵里子が多く、和花が少ないという学級の傾向を全体で共有した。こうした意見の把握は、挙手でも確認できる。しかし、6年生になると一人だけ考えが違ふことに不安を感じ、自分の考えではない、多数派の意見に挙手したりする場合がある。少数派の意見があるからこそ、議論が深まっていくので、同調が起きてしまうと、浅い議論になってしまう。[発表ノート]を使うことで、子どもたちが集団同調することなく、自分の意見を素直に表出できた。



その後、教員機の[画面一覧]で状況を確認し、テレビに投影しました。絵里子が多く、和花が少ないという学級の傾向を全体で共有した。こうした意見の把握は、挙手でも確認できる。しかし、6年生になると一人だけ考えが違ふことに不安を感じ、自分の考えではない、多数派の意見に挙手したりする場合がある。少数派の意見があるからこそ、議論が深まっていくので、同調が起きてしまうと、浅い議論になってしまう。[発表ノート]を使うことで、子どもたちが集団同調することなく、自分の意見を素直に表出できた。

【*3】

授業の終盤では、タブレット端末から離れて役割演技をした。その際 2 人の児童に「絵里子」「真紀」の立場で役割演技をさせた。このとき、児童が教材の事前読みで[気づきメモ]に入力した感想が役に立った。今回の事前読みは、公開授業の一つ前の授業の終末 10 分を使いった。そして「3 人の子についてどう思うかを小さなことでいいので[気づきメモ]に書きましょう」と指示した。短い時間だったが、児童はさまざまな感想を入力した。私は本時が始まるまでの休憩時間に、全員の気づきに目を通し、誰がどのような意見をもっているのか、キーとなる意見をもっている子は誰なのかを授業が始まる前につかむことができた。実際、対立意見が欲しい場面で「Aさんは、どう考えたの?」と聞くと、意図したとおりの考えを発表し、議論が深まっていた。



《実践を振り返って》

2年前「道徳科の授業で一人1台端末を使いましょう」と言われたとき、「絶対無理だろう」と思っていた一人だ。「とりあえず[ポジショニング]をしよう」と思ってスタートした。しかし、研究の中で先生方の授業を参観して、さまざまな授業方法があることに気づいた。次第にICT活用の幅が広がっていった。そして今では、「道徳科でこんなふうに使えないだろうか」「自分ならどう使うだろうか」と主体的に考えている私がいる。教材を読んだ初発の感想だけでなく、一つ一つの学習活動を終えたときのちょっとした気づきや思いをメモとして蓄積することで、変化の見取りにも使えるのではないかと、ワクワクしながら考えている。気づきを見取って授業と評価をつなげていく、そのような方法をこれから探していきたい。